

宮城県慶長使節船ミュージアム 伊達政宗の黒船／サン・ファン館 館長

ひらかわ あらた
平川 新

未来への航路

黒船は
ガレオン船だった

本連載③「支倉常長の肖像画」で、伊達政宗が造った遣欧使節船復元の手がかりはこの肖像画にあると書きましたが、衣装の話に回数をやしてしまいました。いよいよ本題です。

肖像画から拡大した船の部分をご覧ください(図1)。船尾には甲板よりも一段と高くな

った船尾楼があり、これとは反対に船首は低くなっています。平山次晴氏(船舶工学)によると、16世紀半ばから17世紀に活躍したガレオン船は、小さな船首楼と高い船尾楼が特徴でした。

なぜ、この船が支倉常長の肖像画に描かれたのか、乗った船はガレオン船だったということがあります。

とはいえ、船首が外洋を向いているのは船尾の九曜紋を見せるためだったのかもしれない。

37 支倉肖像画に描かれた「政宗の黒船」

れているのでしょうか。写真では不鮮明ですが、船尾には伊達家の家紋である九曜紋が描かれています。メイ・マストに掲げられた旗には、なんと支倉家の家紋である「逆丁」に違い矢(ぎやくまんじ)がはたえられています。また、伊達家と支倉家を象徴する船として描かれていた日本出帆の情景として描いた可能性もあ

せん。この九曜紋と支倉家紋を同時に描くためであればデザイン上の構図になりますので、出帆時にこだわる



図2. 初代復元船に装備した大砲

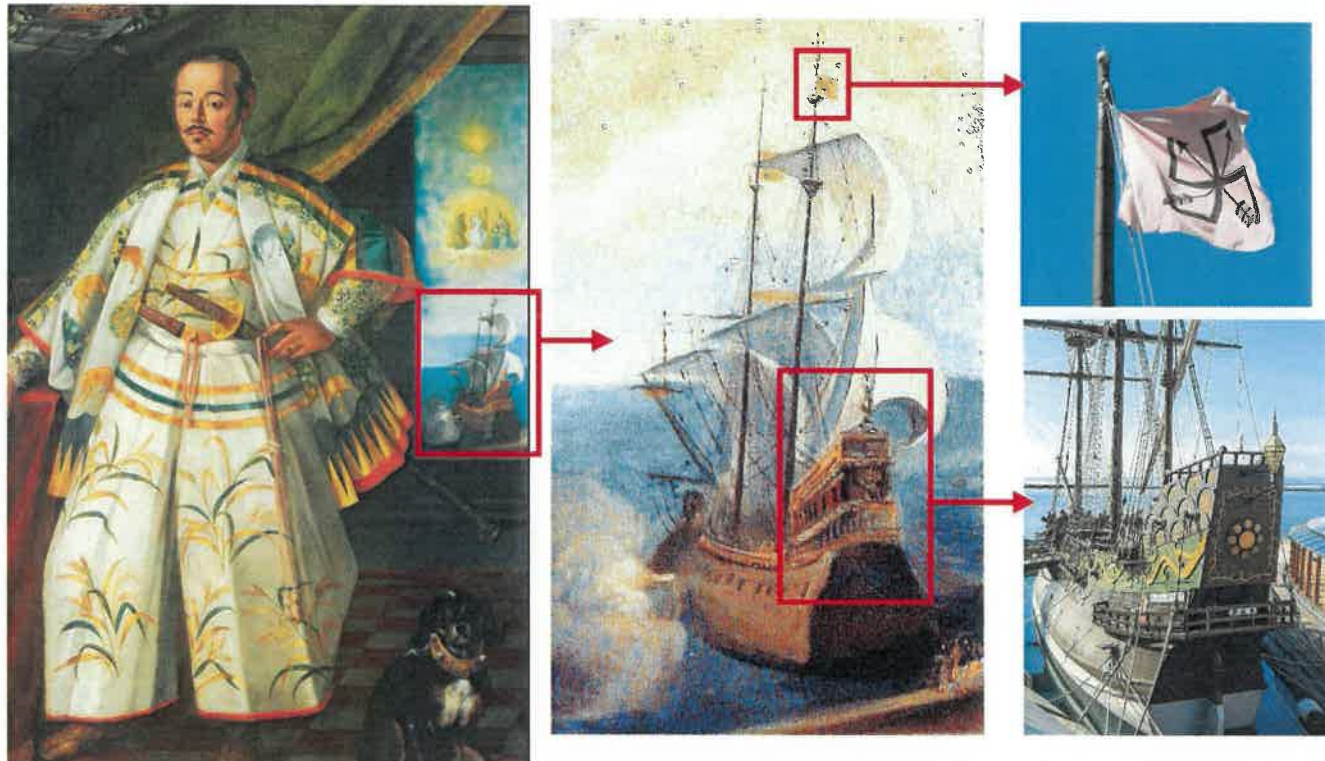
描かれていた
二つの家紋

この画を描いたのはローマの画家アルキータ・リッチですが、もちろんリッチがアカブルコで使節船を見たわけではありませぬ。ガレオン船は地中海でも航行していましたが描くことはできませんでした。伊達家の九曜紋と支倉家の家紋は支倉から教えてもらわなければ描くことはできません。かなり正確に描かれていますので常長は二つの家紋の絵柄を持参していたのでしょうか。

ただし、マストに実際に支倉家の紋章旗を掲げていたのでしょうか。当時のヨーロッパのガレオン船には国旗や提督旗、船主旗などが掲げられ、商船の場合には船長旗もあつたとのこと。支倉は政宗の使者ですが、指揮官でも船長でもありませんので、支倉家の紋章旗がメインマストに掲げられて太平洋を航行したとみるのはむずかしいでしょう。ありうるとすれば伊達家の旗ではないかと思えます。

ではなぜ、この絵では支倉家の紋章旗がメインマストに描かれているのでしょうか。それは支倉が、伊達家が遣わした大使としてローマに乗り込んでいったからではないでしょうか。ローマの入市式パレードでは支倉が主役であつたように、支倉こそ使節団の代表として迎えられていました。伊達家の家紋は船尾に描かれていますが、画家としては常長に敬意を表して支倉家紋をメインマストに描いたのかもしれない。

図1. 支倉常長肖像画の船部分の拡大図



礼砲を放ったということ、大砲を積んでいたということになります。使節船は貿易のための商船であつて、軍艦として造られた船ではありません。しか



筆者略歴
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。

東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26-31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。